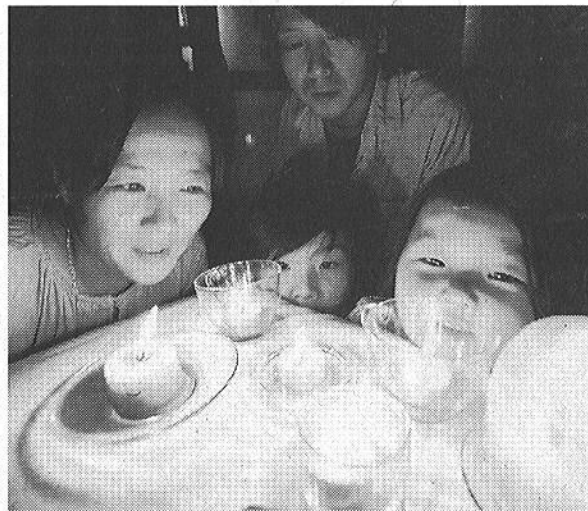


家庭で「原爆の火」ともし 平和思いキャンドルナイト

自宅にともされた「原爆の火」を囲む綾子さん（左端）ら角田さん一家。21日夜、大阪府東大阪市



夏至や冬至の時期に照明を消し、ろうそくの火で過ごす「キャンドルナイト」で、戦後守り抜かれた「原爆の

火」をともし、家族や友人と平和を考える取り組みが広がっている。夏至の21日、大阪府内の家庭でも小さな平和の灯がともった。

原爆の火は、原爆投下後の広島でくすぶる残り火を復員兵が故郷の福岡県八女市星野村に持ち帰ったのが始まり。半世紀以上にわたり、復員兵の家族らが火を受け継いできた。現在は市内の平和の塔で管理されている。

2007年冬、大阪市の若者らでつくる団体が、原爆の火を使って平和とエコを考えるキャンドルナイトを企画。合併前の星野村は火の管理方法を条例で厳格に定めており、当初は村で採火した火を直接、イベント会場などへ運ぶ苦労があった。

しかし今年、八女市は「団体と」信頼関係ができた」として札幌、新潟、京都、神戸、長崎の各市など全国10カ所に1シーズン限定の分火を認定。そこからさらに火を分けてもらい、家庭でキャンドルを囲むこともできるようになった。



大阪府東大阪市の主婦角田綾子さん（41）は今月12日、知人から火種を受け取り、携帯力イロで大切に守ってきた。「いろんな人の気持ちがこもった火。家族5人で平和の意味を考えたい」と話した。